

SONRISA

そんりさ

Vol.134



グアテマラ「希望をはぐくむ女性たち」協会が開いているコミュニティ教育のクラス（石川智子撮影）

「そんりさ」はスペイン語で「微笑み」を意味します。私たちレコムは様々な活動を通じてラテンアメリカ・カリブの人々と喜びを分かち、共に生きていきたい、彼らの微笑みを私たちの微笑みにしたいと考えています。

グアテマラ・ニカラグア報告

- | | | |
|----|-----------------------|--------------|
| 02 | グアテマラ・ニカラグア報告 | ……石川智子・新川志保子 |
| | 短編映像を若者が制作 | ……池田佳代 |
| 12 | メキシコ麻薬問題 | ……翻訳ワークショップ |
| 15 | ボリビアだより 続・国際協力の仕事を続ける | ……藤田護 |
| 22 | ラ米百景「ヘルマン事件に真実の光」 | ……伊高浩昭 |
| 24 | 音楽三昧♪ ペルーな日々 | ……水口良樹 |
| 26 | メキシコ食巡り 鱈のビスカヤ風 | ……ミゲル・アクーニャ |
| 27 | ニュースクリップ | ……サザエ |

グアテマラ共和国キチエ県および ポアキル町に関する報告

新川 志保子

DST (Digital Story Telling) ワークショップを行ったサンファン・デル・オビスポとコマラパの二か所の様子は池田佳代さんの報告に詳しいので、ここでは、それ以外に訪問した場所の報告をします。

《キチエ県―「希望をはぐくむ女性たち」協会》

10月1日と2日にかけて、キチエ県の「希望をはぐくむ女性たち」協会（以下希望協会）を訪ねました。希望協会はレコムが今年支援している女性組織で、支援金は活動経費と組織強化に充てられています。また希望協会は大阪司教区シナピスこども基金よりコミュニケーション教育の助成金も受けており、そちらの状況確認も同時に行いました。コミュニケーション教育は助成を受けて今年で三年目、最終年です。

前回訪問（今年3月）後、今回の訪問までの活動としては、第三回目組織強化研修、9月の総選挙前の選挙に関するワークショップ、運営委員会月例ミーティング、奨学生グループとの月例ミーティングなどがあります。

組織強化研修の第三回目は、協会運営における会計管理の重要性と、運営委員一人

一人が自分の活動に自信をもち、運営委員会内部の信頼関係を強化するというテーマで行われました。以前の二回同様、この研修を運営委員はとても評価しており、それぞれの役割が明確になり、運営の仕方などとても役に立っているということでした。

選挙に関するワークショップは、3か所で開催し、投票の重要性、候補者について、何を基準に選ぶかなどの情報を共有し、参加率も高く意味があったとの評価でした。コミュニケーション教育も奨学生との毎月のミーティングを重ねて、運営委員会が彼らをサポートしており、順調に進んでいるようでした。

このようにこの半年間で成果が出ている部分がある一方、いくつかの問題点も見わかりました。

まず、組織強化研修で協会運営については意識と責任感も生まれていますが、それがなかなか実際の運営に反映されていないということがあります。例えば毎月の運営委員会の旅費支給で受領のサインをもらい忘れてそのままになっている、領収書が取れない支出はその旨記録する必要があるのでに漏れていて金額が後で思い出せない、などということが多いようでした。そしてこの役を一手に引き受けているのが書記のマリさん、という以前と同じ状況が続いていました。

この責任を軽減するためアシスタントを雇うはずだったのでは？ と聞くと、確かにドミンガさんという元奨学生が雇われてはいました。が、運営委員がドミンガさんをどうか活用してよいかわからず、マリさんの責任が減っていない、ということが明らかになりました。

ドミンガさんはやる気はあるようでしたが運営委員からの指示がなければ何をしたいのかわからない、とのことでした。彼女がやっているのはコミュニケーション教育に関する文書整理程度でした。ドミンガさんは教員資格はありますが会計知識はなく、会計をきちんとしなければならいのになぜそんな人を雇うのかという疑問が湧きます。そもそも運営委員会に会計知識がないため、どんなスキルを持つ人を雇うべきか理解していなかったのに加え、「仕事がなく困っている」「あの子はまじめない子だから」という同情からドミンガさんを雇ったようでした。とりあえず、会議の議事録や会計記録の作業はドミンガさんに担当してもらおうことなどを説明しました。が、組織運営のノウハウを持たず手探りの状態で、協会がうまく機能するまでには長い時間がかかりそうでした。組織強化ファシリテーターのチャニスさんは、組織がうまく機能するためには専従が二人は必要、と言っています。二人分の給料を出す余裕は今の状態ではありません。わずかな予算でどのように組織強化を続

けて行けるか、が大きな課題です。

《チマルテナンゴ県 グアダルルーペ協同組合》

グアダルルーペ組合は、内戦で軍に夫を殺され、自らも子どもを抱えて逃げなければならなかった女性たちが助け合う中で生まれた組織です。マヤ女性としての総合的な人間形成と教育をその活動の中心に据えています。現在組合員は165人で、ポアキル町に自分たちの建物を持ち、そこに事務所、民芸品の販売店、食堂、作業所などがあります。これまで、グアダルルーペ組合が活動しているコミュニティでの成人女性への識字教育、女性を対象とした政治参加、女性の権利などのワークショップ、経済的自立のための裁縫や織物などのトレーニングなどを行ってきました。また、貧困のために学校に行けない子どもや若者（特に少女）のための奨学金プロジェクトもありましたが、現在は資金が途絶えて中絶している状態です。

農村部では病気になっても医者にかかる費用がない人が多く、そもそも医者がおらず医薬品も手に入らないなどの問題があります。そのため、薬草や代替医療の知識を身につけ、活用する活動もしています。また、ポアキルの歴史、特に内戦の歴史を残すための壁画運動などのコミュニティ活動にも参加しています。

レコムは2009年よりグアダルルーペ組合から民芸品を仕入れていきます。グアダルルーペ組合の作る民芸品には詳しくありませんでしたが、その活動はよく知らなかったもので、今回グアダルルーペが活動しているコミュニティの一つを訪問させてもらいました。案内されたのはパラマという村です。ポアキルから車で約30分の所にあり、約100家族が住んでいます。（写真上）



最初にグアダルルーペのメンバーであるシミオナ・ロペスさんの家を訪ねました。シミオナさんは昨年、ハリケーンの時、夫が土砂崩れにのまれて行方不明になりました。その後一週間捜索しましたが結局今に至るまで遺体も見つからないという事です。子どもは18歳を筆頭に8人で、ハリケーンの豪雨で家の物や衣類などが流されてしまったという事です。父親がいなくなつて一家はさらに困窮しており、暗い表情のシミオナさんにかける言葉も見つかりませんでした。

次にマルタ・ソンさんの家を訪ね。マル

タさんの夫も土砂崩れにのまれ亡くなりました。こちらは遺体は見つかったそうですが、生活がずっと苦しくなったのは同様です。マルタさんは小さなかごを編む内職をしている最中でした。高さ5センチほどのかごとその蓋を作るのですが、これを1ダース作ると6ケツアル（約60円）になるそうで、1日に2ダース作るそうです。シミオナさんもマルタさんも織り物を作りますが、注文があまりなくて織物だけで生活を支えるのは無理ということでした。最後にメンバー20人がそれぞれ子どもを連れて集まっている家に。昨年のハリケーンで収穫がやられ、その後も復興がはかどっていないために、今年の食糧事情はとても悪いこと、子どもたちの栄養失調が問題だということをお聞きしました。

時間がなく、ゆつくり皆さんの話を聞けませんでしたが、グアダルルーペ組合のコミュニティに根ざした活動の一端を見ることができました。パラマ訪問でもよくわかりましたが、去年のハリケーンでこの一帯は大きな被害が出て、住民の食糧事情が悪化しています。特にこどもの栄養失調は深刻で、運営委員は支援を求めてあちこち申請したり陳情したりしていますが、なかなか通らない状態です。現在一か所から食糧援助を取りつけ、6つのコミュニティで合計400人の子どもに月一回穀物の支給を行っていますということでした。

グアテマラ大統領選決選投票結果

石川 智子

去る十一月六日、大統領選決選投票が行われた。九月十一日の選挙で過半数を獲得した候補者がいなかったため、上位二名―愛国党（PA）の退役将軍オットー・ペレス・モリーナと新自由民主党（LIBER）のマヌエル・バルディソン―による決選投票となったもの。結果は、ペレスが得票率五四%で当選した。副大統領は、現国会議員のロクサーナ・バルデティで、グアテマラ初の女性副大統領となる。

投票率は六〇%で過去最高。選挙人登録者七三〇万人の二五%を占める首都他の都市部で圧勝したことがペレスを勝利に導いた。ペレスのスローガンは「鉄拳（マノ・ドゥーラ）政策」、治安対策への強い態度をアピールし続け、治安の悪化に危機感を高めてきた都市部住民の票を集めた。元軍人であり軍部からの支援はもとより、経済界の支援も早い段階から取り付けていた。

マヌエル・バルディソンは、現政権の貧困者救済プログラム継続やボーナス増額などを打ち出し農村部住民や労働者にアピールしてきたことと、反ペレス票も得て、地方ではペレスを上回ったが、都市部を軽視したことが大きな

敗因となった。生活・教育水準が高く治安を優先する都市部住民と、食糧援助他の生活支援を優先する農村部の貧困層という二つの対照的なグループに分れ、票数で都市部が決め手となった。

それにしても、長い軍政に苦しみ、内戦中の軍部による弾圧で甚大な被害に苦しんできたグアテマラで、なぜ元軍人が、しかもジェノサイドの責任までも問われるべきオットー・ペレスが大統領に選出されるのか。

和平合意後、内戦中の人権侵害について真相究明の努力が行われてきたとはいえ、「軍部が」「ゲリラが」に留まり、個々の責任追及は行われておらず、また歴史は広く共有されていない。軍部に協力して弾圧に加担した自警団など、名前や形を変えても実態が存続している地域も多い。

犠牲者グループや人権組織の地道な活動により、最近やつといくつかの重要な虐殺事件についての裁判が行われ始め、当時の軍部エリートへの有罪判決や高官の逮捕者も出ている。ジェノサイド裁判への動きもある。軍部にとつては容認できない事態である。ペレスが当選すれば軍部からの巻き返しがある、と言われていたが、既にゲリラによる人権侵害事件の責任追及を求める軍部関係者のデモや具体的な告訴も始まっている。

長い軍政から民政移管して二六年が経つが、民主主義の最低限の形式が取り入れられたのみで全く発展していないことを問題視する声が多い。

政党は選挙のための道具でしかなく、選挙戦は大金をつぎ込まなければ参加もできない、当選すれば選挙戦に投資したパトロン言いなり、選挙管理局は弱体、選挙法違反の取り締まりもなくやりたい放題、都市部の票が農村部・貧困層・先住民の票より重く、女性・先住民などは排除されたまま。こうして国家機関は一握りの権力者に糸を引かれ、その利益を守るためのメカプロジェクト、利権譲渡、公共事業契約が行われ、法制定も然り、社会運動や抵抗運動は犯罪扱いされ押さえ込まれる。

四年毎の選挙で与党は必ず負け、新しい与党が生まれる。「こいつは駄目だったから、こんどはあいつ」という状態。しかし与党が変わっても、この構造では何も変わらないどころか悪化するのみ。前号の総選挙結果ニュースの最後に、『とりあえず「民主的選挙」が成立した。』と書いたが、これを民主的選挙と呼んでいるのが問題だと言える。

訂正 V 総選挙についての前号記事で、マヌエル・バルディソン（五一才）は（四一才）の間違いでした。

活動や想いを伝える短編映像を

若者たちが制作―グアテマラ

池田 佳代

9月下旬、グアテマラのサン・ファン・デル・オビスポとサン・ファン・コマラパにて自分の語りと写真やイラストなどを組み合わせた短編映像を制作するワークショップを実施。11月初旬には、東京・大田区にて同様の映像制作とグアテマラで完成した作品の上映会を開催。その経過をお伝えします。

《自分の言葉でグアテマラの今を語る―12作品が完成》

このワークショップに参加したのは、サン・ファン・デル・オビスポのマリンバグループ「ウナプーのそよ風」のメンバー5人（11歳〜15歳）と、サン・ファン・コマラパにある青少年組織CJCを構成する8グループのうちの演劇やダンス、文化回復などに取り組む9人（14歳〜40歳）です。2日間でストーリーを考え、ナレーションの録音と映

像編集を経て完成上映会を行いました。

プロセスは、自分が作りたい物語をメンバーに語り、それへの反応や質問を受けることで、物語を成長させるストーリー・サークルから始めます。これは、デジタル・ストーリーテリング（DST）というアメリカのバークレードで1990年代に始まった手法にならったもので、一人または数人で考えるよりも、伝えたいことが明確になる傾向があります。また、語り手は自己認識を通じた成長の機会に、聴き手は傾聴や受容を養う機会になり、相互に共感や理解が生まれ関係性の構築につながると言われています。

ワークショップに参加した子どもたちは、PCを使った新しい経験ができるのと張り切っている様子でした。完成作品の上映会では、自分の声が聞こえてきて恥ずかしいという声が多く聞かれる一方で、日常の会話では語らないことが語られたことで、親しみや思いやりの気持ちが増したように感じました。青年たちも同様に、新しい経験に積極的に取り組みました。初めての映像編集操作にもイライラせずに取り組み、「意外に簡単だった」との感想もあがるなど潜在力に気

づく機会にもなりました。

完成した作品はどれも、素直に自分の気持ちや考えを語っています。生い立ちや家族、仲間への信頼や活動に夢中になる理由、社会問題とめざす社会、悲しみとそこから得た目標など様々です。

《言葉が分からなくても伝わる―語りの力が想いや社会を映し出す》

11月に東京で実施したグアテマラの作品上映会では、まず始めに、グアテマラの伝統音楽や歴史的背景を紹介しました。その後で、これらの作品を一堂に視聴したことで社会像が浮き彫りになり、喜びや悲しみ、解決すべき課題が見えてきたようでした。参加者からは、「制作者たちの希望がかなえられるのか気になるので今後も伝えてほしい」「日本の若者にも見せたい」「言語は分からないが語りの力で伝わった」などの感想や感動が次々と述べられ、それらを制作者たちに伝えることになりました。グアテマラでも、ワークショップ開始前に、日本で同じ手法で制作した作品を鑑賞しました。作者や語りのエピソードに関する背景を紹介したことで、「背景を聞いたら理解できた」「同様の経験が

ある」「言葉はわからないが映像でも伝わる」という声が上がりました。

「月に東京で行ったワークショップでは、作品が完成しました。京都でもDSTワークショップが行われているので、交流したいという人たちの作品を翻訳してグアテマラの人たちにも見ていただくと思います。

来月2月、サン・ファン・デル・オビスポのカサ・ムセオにブロードバンド環境が整うと聞いているので、3月には日本とグアテマラをウェブカメラでつないでリアルな対話を実施したいと思いません。参加したい、興味がある、という方はお気軽にお問い合わせください。具体的なことはこれから決まってくるので、アイデアのご提案も歓迎します。(問合せ: info@ota-suisin.org NPO法人おれた市民活動推進機構・中野まで)

《今後に向けて:》

ラテンアメリカと日本の草の根の交流を通じた多文化理解・国際交流を目的に、毎年「万国ずつ交流先を増やしたい」と考えています。9月中旬にニカラグアを訪問し、カリブ海側のワスパンやビルワイ、太平洋側のマナグアでコミュニテ

ィ活動家や先住民女性NGOなどたくさんの人に会いました。DSTへの関心も高く、気候変動による影響など暮らしにかかわる事柄や文化の継承に役立たいとの声が多く聞かれ、私も協力したいと思えました。

グアテマラでのワークショップは、PCが壊れて編集できなくなったり、コンピュータウイルスに悩まされたりとアクシデントの連続でした。コーディネーターや通訳にご協力いただいたレコムの新川志保子さんにはニカラグアの道中で何度も、石川智子さんには実施地へのワークショップの説明を事前に行っていたこともあり、すぐにPC操作などの手順を飲み込んでくださり、結果的にはワークショップのアシスタントも担っていたいただきました。おかげで、限られた設備と時間の中での作品完成にこぎつけました。本当にありがとうございます。

☆完成作品の「タイトル」制作者/年齢
「マリンバ」ジョナタン/11歳
「ぼくの人生」フアン・カルロス/12歳
「僕はフェルナンド」フェルナンド・14歳
「ある人生の物語」ステフ

アニー/15歳 「田舎道」オスカル・ホセ/14歳 「僕の国の暴力」ハイロ/16歳 「ダビンソンの物語」ダビンソン/16歳 「一人っ子」ステファニア/17歳 「僕の小さな物語」ヘレミアス/20歳 「環境・昔と今」ロセ/24歳 「カクチケル語を取り戻す」エリザベス/26歳 「内戦」ビクトル/40歳

「マリンバ」

僕の名前は、ジョナタン エマヌエル・エルナンデス・ラフポップで、アンティグア・グアテマラのサン・ペドロ・ラス・ウエルタスに住んでいます。

マリンバは、グアテマラの国の楽器です。マリンバは、グアテマラにある、大きく強い木で作られています。

マリンバを通して新しい良い友達もたくさんできたので、楽しいです。アグア火山の麓のサン・フアン・デル・オビスポのコミュニテイ音楽学校で習っていて、一緒に色んなことをして遊べる友達がいいます。

ルイス・デ・リオン・カサ・ムセオに行くのも楽しいです。広くて、僕の好きな果物の木もたくさんあります。

それに、知らなかったたぐさんの場所にも行きました。大きくてきれいなカプチーナス教会などです。

僕はマリンバが好きです。大きい高い音とか、面白い音がしたり、僕が弾く曲の中でも、『高原列車』や『魂』、『シャルダス』など、僕の好きな素敵な曲があります。

「僕の小さなストーリー」

僕はフアン・ヘレミアス、20才です。兄弟は9人。1999年に両親が離婚しました。

10才まで勉強できませんでした。これまでに、兄弟たちと一緒に、自分で働くことを覚えました。

また、僕を支えてくれる人たちのおかげで、自分の価値を認めることを覚えました。

良い親友を2人失いながらも。彼らは家族の問題があつて自殺してしまいました。

同じ問題のために、僕の兄弟の一人もそうなりかけました。

それによって随分考えさせられました。そんな人たちを見ながら考え、僕はいろんな問題を乗り越えてきました。

こうした状況の中でも、アーティストのグループを作りたいという思いを僕は決して失いませんでした。今、そのグループがあります。みんなに、いかに悪いことは近づかないようにするかを教えています。前向きな姿勢を失わないでやっています。強く思っています。



▲ アンティグアで演奏する「ウナプーのそよ風」



▲ リン・フアン・テル・オピスボの背後にそびえる『水の火山』



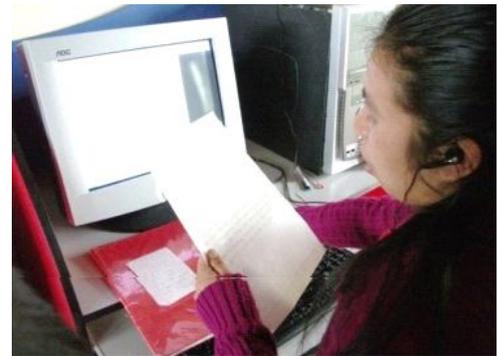
▲ (上右) (上左) 先史からの言い伝えや内戦時の事件などの歴史を継承しようと描かれた壁画 (ポアキルの市庁舎)



(上右、上左) (1) ストーリーサークル (コマラパ)



(2) 台本作成 (コマラパ)



(3) ナレーションを練習し、パソコンソフトで録音 (コマラパ)



(4) ナレーションを聴きながら写真をレイアウトして編集



(5) 完成したビデオを上映し、みんなで視聴



▲編集をサポートする石川智子さん



▲ 台本へのアドバイスの求めに応じる新川志保子さん

ニカラグア報告（9月13日〜20日）

新川 志保子

ニカラグアは、レコムが以前関わっていたカリブ海岸自治地域（コスタ）の北部自治地域 RAAAN を中心に訪問しました。先住民女性リーダーとして日本にも二回来たことがあり、以前のスタディツアー受け入れに協力してくれたロス・カニンガムさんが私たちに同行してくれました。

コスタはサンディニスタ革命政権時代に北部と南部の二つの自治地域となり（1987年）現在に至っています。それぞれの自治地域には自治政府、自治議会があります。また、自治地域大学もあり、自治を担い、天然資源の管理・運用のために地域の中での人材の育成をはかっています。

今回訪問して、ここ十年の自治プロセスの進展をか



いま見ることができました。それは自治地域の中に新しい行政区画として作られている「テリトリー」です。「テリトリー」とは先住民の各コミュニティが居住し、使用してきた地域を測定して制定したもので、それぞれのテリトリーはそこに住む住民（コミュニティ）がその資源の管理・運用についての決定権を持っているということです。北部自治地域には18のテリトリーがあると、このことでした。コスタはニカラグア全土の半分の面積を占め、森林、鉱物、海産などの天然資源のほとんどはコスタにあります。そしてそ

この資源を管理・運用は自治の土台となるものです。その管理・運用を自治地域政府からテリトリーへと分権が一歩進んでいます。

私たちはココ川流域にあるワspan、そして北部自治地域の首都であるビルウイ（プエルト・カベサス）を訪問しました。

ワspan

まず首都マナグアから飛行機でワspanへ。ワspanはココ川流域で一番大きなスキートの町です。ココ川はホンジュラスとの自然国境になっていて、川の向こう側はホンジュラスです。スキートの人たちは歴史的にこの川の両側に住んでいて、国境ができてからも川を行き来してきました。ワspan側に住むスキートの人たちが川向うに畑を作っていたりしたので、近年ホンジュラス側の土地は買い占められて牧場になってしまい、家畜の糞や牧草地への農薬散布などで川が汚染されてしまいました。ココ川（ミスキート語でワンキ）は一带にすむスキートの人々にとって母なる川であり、人々にとって移動、魚を取る、憩いの場所として親しんできたのですが、汚染により、すっかり様相が変わってしまいました。今では川で泳ぐ人もほとんどみられません。また、雨季にもかかわらず川の水位がとても低いままなのも気になりました。ワspanの人々は「ココ川は死んでしまった」と言っています。

ワspanでは、ロスさんが経営するペンションに宿泊。ここには会議ができるスペースもあり、ワンキ・タグニのオフィスがあり、

活動拠点となっています。ワンキ・タグニはロスさんが始めた NGO で、ワスパンを中心にココ川一帯のミスキート・コミュニティの発展、特にミスキート女性の発展のための活動をしています。今年が、ここでも活動資金の確保は大きな問題です。

翌日はロスさんが招集してくれてワスパンで活動しているグループの人たちとの集まりを持ちました。参加してくれたのはすべて女性で、ワンキ・タグニのメンバー数人のほかに、イマトウアという地域 NGO のメンバー、カトリック教会の社会司牧で働いている人、ラジオ局でアナウンサーをしている人、中学校の校長（カトリック教会が運営している中学校で日本大使館の草の根援助で校舎を新築したということでした。警察署の中の女性担当官など10人でした。

池田さんが DST について説明し、日本で買った DST で作られた作品をいくつか紹介しました。参加した人たちの関心は高く、コンピュータがあり、基本操作さえできれば短いビデオ作品が作れるという簡便さがとても評価されました。今回は下見ということで DST の説明をして来年のワークショップ開催の準備をするのが目的でしたが、さっそく

やってみようということになり、短い時間ながら、ラジオ局で働いているバレンティンさんが、すっかり変わってしまったココ川の今と昔の写真について、自分の子どもの頃の思い出なども織り込んで完成させてしまったのには感心しました。そして参加者からぜひ DST ワorkshop を開催してほしいと要望が出ました。ワンキ・タグニなどがコミュニティの女性たちにコンピュータ・スキルを身につけてもらう活動をしています。コ

ンピュータの操作を覚えても、それを何に活用できるのかがわからないために二の足を踏んでいたが、これならぜひ覚えたい、と発言してくれた人もいました。

ワスパンでは他に、ワスパン地域の環境問題についての関心を高め、知識を深めるためのラジオ番組を作っている人や、コミュニティで公衆保健の活動をしているグループなどに会うこともできました。また、ミスキート語と英語、スペイン語の辞書を作ったデイオニシオ・グティエレスさんⅡ写真Ⅱにもお会いしました。デイオニシオさんは、聖書のミスキート語訳もしています。自宅を小さな記念館にしており、これまでに出版した物や、ワスパンの生活文化について集めたものを展示しています。

ビルウイ

ワスパンの後、ビルウイに移動。北部自治地域は、2007年にこの地域を襲ったハリケーン・フェリックスで大きな被害を受けました。ワスパンを出てビルウイまで車で約4時間、ハリケーンの傷跡をあちこちで目しました。この一帯はカリブ松が多く、以前は途中ずっと松林であった地域が大きな木が



のきなみ倒され、のっぺらぼうになり、ハリケーン以後に育った若木がとどころどころにひよろひよろと見えるだけなのです。被害の甚大さがよくわかりました。

ビルワイでは、先住民族自治と発展のためのセンター CADDPI を中心にして、自治地域大学 URACCAN、ラジオ局関係者、社会環境に関する情報センター CISA、自治推進センター CEPANA などの地域 NGO、自治議会などで女性委員会を担当している議員などと DST についてのミーティングをもつことができました。ここでも参加した人たちの関心はとも高く、コミュニティの人たちがこういうメソッドを覚え使いこなす意義を理解してもらえたと思います。ワスパンでの集まり同様、地域の問題を共有するためやコンピュータ・リテラシーを推進するためにこういうツールを使ってやりたいという声が聞かれました。参加者の中に、童話を書き、それにつけるイラストも描いている女性がいて、自分の童話をイラストを見せながらナレーションをつける形で作ってみたいという提案もありました。

CADDPI はニカラグア、中米カリブ地域の先住民族と環境（特に気候変動）に関する調

査や研究を行い、先住民族の自治を強化するための提言などを行っている NGO です。ちょうど11月21日から25日まで、ラテンアメリカ先住民族女性と気候変動についてのワークショップを準備しているところでした。このワークショップにはラテンアメリカから約40人の先住民族女性リーダーが集まるということでした。

Twin War

双子の都市／双子の戦争―麻薬戦争にさらされるメキシコ国境の州チワワ州―

2011年10月31日

ビクトル・キンタナ

米墨国境のすぐ南、チワワ州において、対麻薬密輸戦争はどのような結果を招いているのか。それを知るべきはアメリカ人のはずなのに、彼らは素知らぬ顔をしているのだ。

米墨国境地域では、「ツイン・プラント（双子工場）」という言葉が頻繁に使われる。マキラドール輸出加工工場が導入されて以来使われるようになった言葉である。こういった産業では、メキシコ側に工場があっても、二国間の論理にしたがう。つまり、メキシコ側のマキラドールで組み立てが行われるが、あらかじめ一部の製造工程はアメリカ側で経っていたり、また後でアメリカ側で仕上げをされたりするというものである。つまり単純に一国だけの論理で理解できる生産プロセスではなく、二国間を行き来してはじめて完成されるサイクルなのである。

フェリペ・カルデロン大統領が2006年12月の就任と同時に宣戦布告した 対麻薬密輸戦争 も同様だ。チワワ州では2008年3月に「チワワ共同作戦」として始まった。これは米墨両国を巻き込んだ戦争である。それを正しく理解するためには、国境の両側における政策決定のされ方、資本の流れ、社会

ネットワーク、行政機関、受益者について考える必要がある。

【暴力にさらされるチワワ州】

チワワ州における殺人、誘拐、ゆすり、武力抗争、商店への放火といった事件の驚くべき件数は、マスコミでよく取り上げられている。しかしこの州を脅かしているのは暴力的な犯罪だけではない。チワワ州では、国家による暴力、個人間の暴力、経済的・社会的暴力もまた集中しているのだ。

暴力犯罪

●凶悪殺人もつとも残酷で目立つ犯罪である。作戦が開始される以前の2007年には、州内では年間約469件で、人口10万人当たり14.4件の割合だった。2010年には殺人件数は5,212件にまで上昇し、10万人当たり148.91件となった。つまり作戦が始まって以来、殺人の発生割合は10倍にもなったのである。インターネット新聞「ラ・オプシオン」によれば、2011年は同州における殺人件数は9月29日時点で2459件にのぼり、そのうちフアレズ市で 1,502件、州都チワワ市で526件となっている。合計すると作戦が始まってからの3年間で、チワワ州全土での殺人の犠牲者はすでに1万1,000件以上になっている。実際、カルデロン大統領の対麻薬戦争において、殺人の3件に1件はチワワ州で起きてい

るのだ。

●若者が犠牲者となる殺人事件… 国立統計地理情報院 (INEGI)によると、2007～2009年の間に、15～29歳の若年者の間での最大の死亡原因は殺人によるものとなった。全国レベルでは2007年には2977件だったものが、09年には7438件に上昇し、147%も増加した。チワワ州では、共同作戦が開始される前年の2007年に殺された若者は201人だったが、2009年には1,647人にまで増えた。719%もの増加率である。つまり、この州では若者たちが殺人被害者となる確率は全国レベルより5倍も高いのである。

●一般犯罪… 検察庁のデータによると、チワワ州で2007年に起こった犯罪の総件数は3万4,800件だった。2010年には件数は6万6,125件にまで増加し、作戦前より90%も増加している。

●告発された誘拐件… 誘拐の告発件数は次のように推移している。2007年は21件、2008年に42件、それが2009年には190件に急増し、2010年には132件に減少した。

●車両の盗難… 作戦開始前年の2007年には州内で9490件が報告されたが、作戦開始から3年後の2010年には3万7577件で、224%も増えた。さらに悪いことに、武器を使用して車両を奪うカ

ジャックの割合が益々増えてきているのだ。

●行方不明…2008年3月から2011年4月までの間に約200人が拉致され行方不明になっている。2011年1月〜8月の間の行方不明者は107人である。

●女性が犠牲者となる殺人…検察庁とチワワ州女性協会によると、州内で殺害された女性の数は2010年には370件にのぼっている。NGO 我らが娘たちに正義をよれば、2011年に州内で殺害された女性は、9月24日の時点までに282人にまでなっている。

チワワ共同作戦が開始されて以来、州内では1万人以上の子どもたちが親を失った。何万人もの人々が引越しを余儀なくされ、そのうち23万人はフアレス市からの移出である。つまり同市の5人に1人が移出してしまったことになる。武装グループが無防備な一般市民に対して強盗を働く事件も増えており、とくにマデラ郡のニコラス・ブラボやエル・アラミージョ区、ウルアチ郡のヒカモラチ村、グレロ郡のパチェラ村その他の地域で多発している。

【国家による暴力】

チワワ共同作戦が開始されて以来、今年9月22日までに警察や軍による人権侵害の告発は1,092件にのぼる。これは実際に起きた人権侵害の割に過ぎないとみられて

いる(2011年9月22日付エル・ディアリオ紙)。

【チワワ州における社会的暴力】

チワワ州では国内でもっとも自殺件数が多く、2004〜2010年の間に1562件の自殺があった。事故は全国で番目に多く、人口10万人当たり1,267件となっている。家庭内暴力は番目で毎月128件、暴力の告発は全国一で、2010年には人口10万人当たり26件となっている。

【チワワ州における暴力が及ぼす影響の例】

チワワ州では暴力による人的・社会的コストは非常に高まっている。たった3年の間に、少なくとも1万人の子どもたちが親を失い、23万人が引越しを余儀なくされ、1万6千戸の家屋が空き家になり、そしてフアレス市だけで転出や行方不明により、社会保障の受益者は10万人も減少した。さらに州内の農村地域の多くで過疎化が進み、多くの村で社会生活が営めないままになっており、恐怖と不安に満ちた雰囲気あらゆる場所に満ちている。

経済的コストも非常に高くついている。2007〜2010年の間に正規雇用は9万2474人も失われた。2010年8月のチワワ州の完全失業率は全国で4番目に高く、就労可能な人口に対する失業率は、全国平均が5.55%であるのに対して、この州では7.44%だった。外国からの直接投資は、2005〜2010年の間に15億140

0万ドルから10億200万ドルと、3分の1以上が減少した。経済成長率も悪影響を被っている。2005〜2010年の間に国内総生産(GDP)は、全国レベルでは年間平均2.03%の成長率だったが、チワワ州ではわずかに1.33%にすぎなかった。賃金水準も悪化し、チワワ州では平均賃金は全国で12位に下がり、全国平均では日給が247.06ペソであるのに対して、チワワ州では24ペソ39セントである。

以上の結果により、チワワ州は国内の大部分の地域よりも急速に貧困化が進んでいる。2008〜2010年の間に全国でもっとも貧困化した3つの州のひとつとなり、25万5千人があらたに貧困化した。さらに2005〜2010年の間に、社会的支援を必要とする人々への公的援助のレベルにおいても全国でのランクをひとつ下げている。

【暴力とその原因及び結果に対するいくつかの解釈】

メキシコ、とりわけチワワ州は、総合的な人的安全保障の危機にある。人道的、経済的、社会的、公衆的、すべての側面において危機的状況にある。これはまさに人道的緊急事態といえる。

しかし暴力や治安悪化とその影響は、メキシコ一国だけに限定された問題として考えるべきではない。対麻薬輸送戦争は、その主体も社会組織も政府予算も作戦も、米墨二国で、超国家的に行われている戦争である。こ

の戦争にかかわって起こるあらゆる事柄もそれに費やされる資本も、国際的に、少なくとも米墨二国の間を行き来し、双方の状況を改善するためのものである。

アメリカ合衆国は対麻薬密輸戦争の方針や作戦を強要するが、より甚大な人的・社会的コストを支払われているのはメキシコ、なかでもチワワ州である。国境の北側ではそのコストはごくわずかしか担っていない。

暴力の原因には、国内的なものもあれば、米墨間の問題や国際的な問題もある。もっとも大きな問題は、マキラドール産業という経済モデルであり、これは急進しては急ブレーキという、つまり国際的な経済サイクルによって成長と不況を繰り返すものである。労働力需要が急に高まったかと思うと失業、そしてまた需要が高まるという極端なプロセスが続く。このマキラドール産業の競争力は、労働力をいかに安く買いたたくかにかかっている。

暴力の原因のもうひとつは、北米自由貿易協定 (NAFTA) によってアメリカとカナダにメキシコが経済統合されたその形態である。この協定はメキシコとチワワ州の経済に深刻な打撃を与え、チワワの場合、州内の多数の農畜産業者はアメリカの同業者らに優位に立てる点はなく、競争に負けて倒産していった。

さらに暴力の蔓延には、都市の拡大や住宅、交通網のあり方が、利用者に利便を提供するためではなく、利益の追求のために無計画に

つくられたことも影響している。

チワワ州における暴力の直接的な原因は、多くの新聞の見出しを見ればわかる。まず挙げられるのが、メキシコ側だけでなく、米墨国境の両側において、犯罪グループが根を下ろし拡大してきたことである。具体的な例としては、テキサス州のエル・パソで生まれたロス・アステカスというギャング団があるが、彼らはフアレズ市でもさまざまな犯罪行為を行っている。

さらに暴力の直接的な要因のひとつとして、多くの組織犯罪に対して、国家が何ら対応をしていないこともある。これは公務員や警察・軍の幹部が組織と共謀しているからである。さらに、暴力が続き、激化していることとの背景には、麻薬密輸撲滅作戦がほとんど警察・軍の活動だけを基本路線とし、麻薬カルテルのトップの逮捕を最優先していることがある。大物マフィアが逮捕されると犯罪組織が分裂し、グループ同士や一般市民に対する暴力が増える結果を招いている。

この米墨両国による対麻薬密輸作戦のベースとなっているのが、メリダ・イニシアティブであるが、これは麻薬組織を弱体化させるためにもっとも重要な二つの側面、マネー・ロンダリングと武器の密輸に関してほとんど予算を組んでいない。さらに悪いことに、ATF (アルコール・タバコ・火器及び爆発物取締局) のようなアメリカ政府の公的機関は火器の売買を規制せず、そのために何千もの武器がメキシコに容易に流入することになっている。そのような武器を犯罪組織が利

用するのである。

【ひとつの結論】

フェリペ・カルデロン大統領が自らの就任と同時に宣言した 対麻薬戦争 は、アメリカからの圧力に従い、自らの就任を正当化しようとするものだった。だがこれは少なくとも米墨両国にとつての戦争で、麻薬の密輸と消費という、メキシコだけでなくアメリカにとつての問題を解決するためのものである。

しかしこの戦争の作戦は、両国の間で平等なやり方で展開している。アメリカ政府は独自に麻薬の消費や常習者に対する麻薬の支給に関して政策を決定し、麻薬の小売りに対する取り締まりは非常に限定的にしか行っていない。その一方でメキシコ政府に対しては、メリダ・イニシナティブ を押しつけ、麻薬密輸マフィアに対する取り締まりを優先し、マフィアと当局の間やマフィア同士の激しい抗争を拡大させている。この作戦の最大の犠牲者はメキシコの一般市民であり、自らの生命と安全と自由、そしてますます擦り減っていく財産を脅かす犯罪が、恐ろしい勢いで増えていくのを人々は目の当たりにしている。

<http://www.cipamericas.org/es/archives/56>

54より 訳： 山本昭代

ボリビア便り（その八）

—ボリビアで国際協力の仕事を

続ける（続編）—

藤田 護（注一）

二〇一一年十一月十六日

〈3. 大使館の仕事をしながらボリビアで夜間の開発学の大学院へ〉

藤田—その（大使館の草の根無償外部委嘱員の）契約が終わって、ボリビアで大学院に行くことになるんですけど、

平柄—契約中に、仕事に慣れてから、大学院に夜行き始めて、ここのボリビアのUMSAの：（国立）サンアンドレス大学の大学院のCIDES（注二）ってところに行ってたんですけど、そこは夜間しか授業をしてなくて、なので仕事の後に、仕事しながら二年間ですね。

藤田—ああそうか、その外部委嘱員をやっている間に授業を取りに行ってたんだね。

平柄—同時でした。週三回。面白かったですね、やっぱり夜開講しているというだけあって、みんなこっちの大学を出て、ある程度政府とか、NGOとかで働いている人ばかりなんで、自分ももうちよつと知識があれば、もっと深い議論ができただろうなあその当時：って思うもんね。でもなかなか：。で先生たちも、御存知のとおり、いわゆる政府のご意見番みたいな人とか、まあ正式にはないけれども。そういうなかなか面白い、アカデミックでかつ政府の政策レベルのところの話もできるような人たちだったので、すごくすごく面白かった。大変だったけど。

藤田—専攻の名前は何て言うのですか？

平柄—「社会開発」っていうんですけど。

藤田—それは Maestra en

Desarrollo Sociat

平柄—学位名は Maestra en

Ciencias del Desarrollo と言うのかね。「開発（科）学修士」って言うのかな。専攻は社会開発。他に農村開発、経済開発、あと哲学関係っていうのがあって、うちの大学は開発学だけの専攻なので、そのうちの社会開発。なんでかっていったら、すごい幅広かったから。人類学もやるし、経済学もやるしっていう。その後もうちよつと細かく言うと、教育学とか鉱業やったりとか、そういう細かいのが色々あって、色んな人と知り合えるし、面白かったけど、宿題が：。

やっぱり大学院は大変ですわっていう。読む本の量はやっぱりもう普通にあってっていう、で週に月水金とか

んで、もう準備は翌日の夜とかしかないわけです、仕事をしていると。で、必ず次の時までには課題があったり、発表があったりするんで、それはスペイン語がまだねえ…、村落開発普及員で田舎のスペイン語だったところがあるから、ありますよねそういうスペイン語ってね。もう辛かったですとしか言えない。もう寝ずに、例えば何ページくらいなんだろう、でも三十ページとか四十ページくらいとかだったのかな、次の授業までに読むのは、A4：じゃなくてカルタ、レターサイズにしてね(注三)。でもレジュメを絶対に作らなきゃいけないとかあるでしょう、大学院で。そういう作業が普通にあつて、なかなかできなく、普通にわたし落とした科目もありますし、結構真剣勝負だったなあっていうのがありました。やっぱり協力隊で学んだスペイン語っていうのは、ある程度レベルまで生活したり、意思疎通したりっていう部分まではあるけれども、やっぱり

りそういうアカデミックな文章とか読むにはまだ足りなかった。でもそこで、二年間ちよつと必死にやりましたっていう感じがあるかなあ。

藤田ーボリビアで大学院に行くというのは、それまでの学位を認めてもらうというのも含めて、手続きが大変でしたか？

平柄ー喉元過ぎれば…ですけど、本当にあの時は大変でした。というのは、日本のいわゆる学士号っていうのがボリビアで通用しないんですよ、正式には。ナントカ条約に加盟していないらしい、ボリビアが。日本の学位はアメリカやイギリスに留学するには効くよね、そのまま。英語バージョンを出身大学で出してもらって通用しますけど、それが通じません、ナントカ条約にボリビアが入っていないから。なので、

convallidacion 書き換えて言えばいいのかな…っていう、日本の学位を

ボリビアの学位に通用させるような手続き、書き換えをしなければいけないかった。その作業が、大体一年半…二年くらいかかった。

それはもう、日本で書類を取って、翻訳をして、その前にこれは日本人の感覚では全然信じられないんですけど、日本で発行されたその書類が本物ですよっていうことを証明するために、日本の外務省に…あれ何て言うんです、つけハンコ押してもらおうやつ、窓口で…(藤田ーそれはこの日本大使館では押してもらえないの?)

いややってないの、日本の外務省で手続き(公印認証手続きといいます)。だからたとえば、日本の大学の証明書があつて、日本の大学のハンコが押してあつて、その大学のハンコが本物ですよっていう証明。で、ボリビア側が要求しているのが、日本の外務省とあつて日本の文科省にハンコを押してもら

ってきてください、あとボリビアの大
使館：じゃなくて大阪だから領事館が
本物ですよっていう…。つまりうちの
大学のハンコがあつて、そのハンコが
本物ですよって証明してくれるのは日
本の外務省で、日本の外務省のハンコ
が本物ですよと、あと文科省のハン
コが本物ですよと証明するために、在
大阪ボリビア領事館がハンコを押すっ
ていう作業があつて。その手続きの面
白さは、何でそこまで手続きが必要
なのか(笑)。まあそういうことを、一
つ一つの、例えば学位証、本当にあの
大学の卒業式でもらう本物の学位証：
卒業証明書じゃなくて：から、シラバ
スから、あの何十ページの四年分のシ
ラバスから、その他成績表から諸々全
部本物ですよっていうハンコを。そう
いう手続きをしつつ、スペイン語に翻
訳して、それも本物ですよってと証明
してもらう手続きを、日本に説明する
のが大変でした。日本で例えば、文科
省とか行つて、窓口とかないわけです。

やってませんっていう話になっちゃう
わけで、そこに説明に行つたりとか、
窓口のないような部署にね。で、その
やってませんって言ってるよつていう
ことを、またボリビアに持ち帰つて説
明して、じゃあこうしてね、とか。で、
ボリビア側も日本人の例が実は初めて
だったらしい、CEUBが。(藤田―な
んだっけ、そのCEUB?) **Comite**
Ejecutivo de la Universidad
Boliviana。「ボリビア大学執行委員
会」って私は日本語に訳したんだつた
かな。だから要は、こつちに行つて話
してこつちに行つて話してつてやつた
りしてたんだけど、まあ一年半後に
は。
藤田―最終的にはうまく行つたんだよ
ね？
平柄―最終的にはうまく行きました。
だけどあれは、何で言うんだろうねえ、
結構要領よくやらないと大変な時間が

かかっちゃう。窓口の担当のひとにま
ず「こういうのが必要書類ですよ」つ
ていうリストを渡してもらうところか
ら始まるわけで、その担当の人がそこ
に何十年も働いてて、「そんなのない」
つてなかなか出してくれないとか(笑)、
もうそういうところから色々あるじゃ
ないですか、ボリビアつて。で、そう
いうとき、一番上の人に聞きにいな
きゃいけない。まあそういう結構テク
ニックとか頭を使うところがたくさん
ありましたが、それで一年半後に、ボ
リビアのいわゆる **licenciatura**、いわ
ゆる(学士号の)学位証をもらいまし
た。
そうじゃなければ、その手続きをし
ないなら、日本の大学が四年でこつち
の大学が五年だよね、その足りない分
の一年間こつちでボリビアで、もう一
年大学をやり直してくださいって言わ
れたの。それなら書類だろうつて。ま
あ時間は同じなんですけど、かかった
時間は：確かに、どつちが簡単だった

かっていうことなんだけど（笑）、まあそしたら書類の方になってこと。まあ、すごく面白い経験ではあったんだなと思っちゃったね。やっぱ変だもんだって（笑）。

藤田—最初は二年間フルに授業を取ってから論文に入るんだっけとか、論文がどこまで今進んでいてとか、どういう風に指導を受けてとかを聞かせてもらえますか。

平柄—こっちの大学院は、まず二年フルに授業があつて、その後に論文っていうのが別付け。大学も同じですよ、だから大卒っていうのと学士っていうのがある、 *egresado* *licenciado* それと全く同じで、修士も授業が終わって *egresado*…いわゆる単位取得済みっていうのか、えっとマスターかっっていう話になるんだけど。

で、私は授業は二年で終わって、仕事をやっている間にそれは終わらせて、

次に論文を書くってなった段階に、ちようど手続きの方も本格的にやり始めて、一年間いろいろやってきたんですけども、今やっているのが *petite* って何て言うんですかね日本で、本チヤンではなくてこういう段取りでやりますっていうところ。（藤田— *petite*

de test 研究計画って言えばいいのかな…）指導教官は、一人が学科の担当官と、一人が論文の担当官がいて、一人ポリビア人、一人ブラジル人、論文自体の担当はブラジル人なんですけど、先生がいて、たまくに連絡とってやってますが、そこで話が飛ぶのが、去年の四月から JICA に現地職員として就職してしまったので、論文が…。

4. JICA ポリビア事務所の現地職員として採用される ✓

平柄—私はもともと何て言うんだろう…、現地で仕事をしたい、もう大使館

の話からつながっているんですけど、現地で国際協力の仕事をするっていうやり方も一つの選択肢なんだなっていうのがあったんです。そこで出て来たんですよね、現地採用という選択肢が。っていうのはもうポリビアに来てトータル五年以上経っているんだよね、もう八年になるかな。もう生活圏が、自分の日常生活がポリビアになつてたと。そうすると日常生活の中で仕事を探すっていうのは、結構普通の思いだよなっていうのがあつて、じゃあでもやっぱり開発関係のところって目指して、勉強してきて、やってきてるから、じゃあ JICA の現地職の空席があるから受けてみようっていう話で、受けたら本場にありがたく採用してもらって、今年二年目に至るといふ。本当に、ねえ、こんな人生（笑）。

藤田—JICA の中での担当はもう変わったりにしてるんだっけ？

平柄—担当は今のところ（同じで）、農

業・農村開発、水、基礎衛生セクター。で、技術協力プロジェクト、無償案件など、まあ案件がありますけども、ボリビアで実施している…。いわゆる二年目になったら更にそうだったんだけど、案件担当として、ロジスティックなことをしたりとか。

藤田―ロジ的な部分っていうのは例えば？

平柄―例えば JICA の案件なんで、無償には日本の企業が入ってます。技プロだったらもちろん日本人専門家が入ってますよね。そういう人たちが活動する中で、いろんなことが出てくる。その人たちの派遣に関係する調整とか。そういう本当にいわゆる事務作業とか経理作業。経理も入ってきて、案件がお金使ってますよね、それに對する支出がいくらとか、何に使ったとか、そういう報告をきちんと上げるとか、そういうことをしています。(注四)

(注五)

藤田―いちばん最初は村落開発の協力隊として来て、今度は JICA の事務所の中で働く職員ですよ。見えてくるものとか、考えることって変わってきましたか？

平柄―変わってきましたね。まだ戦略がどうのってとこまでは分からないんですけど、その政策レベル的なものは全然分からないんですけど、協力隊のときはやっぱり身近にいた人たちが何を考えてっていうことに、すごい興味があった。でも今の仕事になると、例えば、ある程度県庁レベルとかそういう、まあ政府レベルの人と話していて、何て言うんでしょうね、何だろうねその皮膚感覚の違いっていう。前は隣にいる、周りにいる人のことを考えていればよかったのが、今は政府レベルの職員の人と話したりするっていうのは、また違いますよね。

協力隊のときから思っていたのは、

その感覚からもう一歩出て仕事をしたっていうのは思っていたところだから、そういう一つ一つ違うレベルで開発援助の世界で仕事をするっていうのは貴重な経験だなあと。だって多分、この住民レベルで自分がそのままいたかったんなら、NGOとかいくらでも道はあると思うんです。でもそこであえて JICA に応募したっていうのは、何かそのもうちょっと違うレベルの部分でやってみたいと思っていたところがあるから。どういう考えで相手側の政府職員が仕事をしているのかとか、どういう感覚で見ているのかとか、そういうのが逆に今度伝わってきます。

結構日常に忙殺されていて、なかなか自分の考えをまとめる時間がなくて、それが今のテーマですね。

る。これから先と、これまでを振り返って

藤田―今の時点で、先を見るのはちょっと難しいかもしれないけど、こ

の先どうなっていくと思いますか？どんな風になっていくといいなと思いますか？

平柄―今の段階で思っているのは、ボリビアにこれからも長くいるっていうのと、今の職でもうちよつと深めていきたいっていうのがあります。いま本当に日常に忙殺されていて、ボリビア政府のシステムとか、勉強しときやよかったです。でも頻繁に変わるじゃないですか、勉強しても別に、ねえ(笑)。省庁が変わったり、世の中の法律がしよっちゅう変わっているからあれなんだけど、そういう部分に、ボリビアの日常生活を通して政策レベルのところまで、これは夢なんですけども、政策レベルの部分までもう少し深く知識を得た現地職員になりたいって思います。現地職員っていうのは、隣にいる住民の感覚を忘れたくないっていうのが、やっぱり協力隊のときのベースなんで、自分の基礎なんで、その感覚を忘れた

くないから、ボリビアに住んで、日本人だけでも現地の職員としてお手伝いできるようになりたいっていうのがある。

藤田―今の時点から、これまで自分が辿ってきた道を振り返ってどうですか？

平柄―行き当たりばったり(笑)？行き当たりばったりって、人に与えるイメージが違うのかな。要はその時その時に自分がこうしてみようと思ったときに、ありがたくそういう機会に恵まれたという風に、自分が言うのはすごいおこがましいんですけど、そういう仕事に採用してくれた人たちがいてくれたおかげで、いま自分がここにいるなあっていう。

でも常に思ってきたのは、漠然とだけれども、戦略的にこうしようと思っ

うか、得意ではないので、漠然と自分の気持の中でこういう風に生きていきたいなって常に思ってた。ここまできました。それこそ思い始めたときからもう十年弱なんですよね、海外で援助関係の仕事をつて思ってた。常に思ってたっていうのは変わらない。そうすると自然と、ちよつとこれはあんまり説得力があるか分かんないですけど、自然とそっちに風が向いていくような気がする。そう思うんですよね、不思議なんですけど。これはほんと数字とかね、ここに行つてこうしてこうすればこう

なりますっていう説明は全くつかないよね、なんだけど常にこうしていきたくってやってきた。じゃあ戦略…、こういうふうにしてこういうふうにして計画をしてたらだめなのかっていう話ではないと思う。だって他にたぶん選択肢はいくらでもあるんだから。幅広く考えて、そういう選択をしていったらいいんじゃないかなあって、そうすると自ずとチャンスが来るんじ

やないかなあって、楽観的なんですかね。でも私は逆に、ちゃんとそういう風に考えながらやってきてる人たちってというのは、そういうベースがあるし、だからどういうところでも対応できる、いろんなチャンスがあったときに、いろんなものに対応できると思うんで、逆に私はうらやましいなと思います。

(藤田―それは戦略的に考えて来た人たちがってこと?)

計画的に一つ一つ積み重ねてきて。私は自分を行き当たりばったりだと思っているので。

(藤田―やっぱりそういう計画的に進んでいくっていうのがうらやましく思えるときがありますか?)

計画的に進んでいく人はいますよねえ。でもそれはごく一部の人だと思うんですね、たぶんね。たぶんごくごく一部の人なんで、どうなのかな、もしその

ごく一部でなければ、自分の中に広い選択肢とこうしたいっていうのを常に十年くらい持ち続けたら道は拓けてくるのかな、と思います。二十代にはきびしいけれどそういうのって。

(藤田―でも十年って言うのは、やっぱり実感のこもった時間のスパンだと思うんだよね。)

(注一) ボリビア・カトリカ大学客員研究員。

Blog:<http://lapazankritwa.blog>

spot.com/

Twitter:

<http://www.twitter.com/mfujita>

1023

なお、このインタビューでの平柄さんの意見は、あくまでも個人としての見解であり、所属する組織を代表するものではありません。

(注二) 正式名称は **Posgrado en**

Ciencias del Desarrollo。開発関係

の大学院教育に特化した組織です。

(注三) ボリビアではA4サイズの紙がほとんどなくて、コピーなどでもA4の方が高くなります。レターサイズを使う方が普通です。

(注四) 日本の開発援助の具体的なスキームの名前等が出てきますが、ここでの説明は省略します。むしろ全体の様子をつかんでいただければと思います。

(注五) 二〇一一年十一月現在は異動により他業務を担当。



▲平柄早苗さん、興味深いお話ありがとうございました。

(おわり)

連載第四十回 『ラ米百景』

伊高浩昭（ジャーナリスト）

第五十九景

「ヘルマン事件」に真実の光

現代ラ米の著名な詩人フアン・ヘルマン（一九三〇年ブエノスアイレス生まれ、八一歳、メキシコ市在住）が二〇〇九年四月に初来日した際、私は東京で長いインタビューをした。質問の中心は文学・詩、アルゼンチンの政治情勢だったが、一つだけ、ヘルマンの家族を襲った悲劇について質問した。それは、一九七六年九月にビデラ軍政から拉致された息子夫婦と孫についてだった。詩人は、自らの執念と努力で到達した真相の一部を語ってくれた。ヴァティカン（ローマ法王庁）の「ある部署」の協力が大きかったという。

ヘルマンの息子マルセロ、その妻マリア・ウラウディア・ガルシア（以下MC）と娘が拉致され、娘は数日後に解放

されたが、息子夫婦が生きて戻ることはなかった。軍の秘密の収容所に監禁された息子は激しい拷問に連日さらされた。嫁MCは一九歳の金髪の美しい女性で、妊娠七カ月だった。赤子が生まれれば、子供の欲しい軍人が警官に渡されることになっていた。

その収容所には、ウルグアイの軍人がさかんに出入りし、チリ秘密警察の要員も訪れていた。米国の諜報・謀略機関CIAの肝煎りでつくられた南米南部軍政諸国の暗殺網「コンドル作戦」により、他国の軍人や警官が亜国の収容所にも来ていたのだ。MCは妊娠八カ月になった一九七六年一〇月半ば、ウルグアイに連れ去られ、それと同時に息子マルセロは殺された。

MCはその年一月一日に女兒を産んだ。マカレーナ・ヘルマンⅡガルシアと名付けられた（もちろん父方性と母方は抹消された）。最初の二ヶ月間、母娘は一緒に暮らすのを許されていたが、それが過ぎるとMCは殺された。赤子は籠に入れられ、一九七七年初め、ウルグアイ人警官夫婦の住む家の前に置かれた。籠には、赤子の生年月日と「育てる

ことができないので、よろしく」との母親が書き残したらしい短い手紙が添えられていた。警官夫婦は、自分たちの子供としてマカレーナを育てた。

ヘルマンは、息子夫婦の行方を追究していた当時のウルグアイ大統領サンギネティに公開質問状を出した。ところが、それが新聞紙面に載った四日後、警察長官が死亡した。「偶然だろうか」と詩人は疑念を呈した。サンギネティは、軍と警察に軍政時代の人道犯罪は暴かないと約束していた。

ヘルマンの話は、ここまでだった。

二〇一一年一〇月二二日、モンテビデオ郊外四〇キロのカネロネス県トレド市にある陸軍第一四大隊施設内の地中から、マカレーナの実母MCの遺骨が見つかった。DNA鑑定で親子関係は証明された。ヘルマンは、私に「最近（二〇〇九年四月以前）、嫁のものらしい頭蓋骨が見つかった。法医学者は九〇%嫁のものだと言っている」と語っていた。もしかすると、その頭蓋骨の鑑定結果が、今年一〇月に意図的かつ政治的に公表された可能性も残されている。後述する

「時効撤廃法」案の国会提出が一〇月一八日だったからだ。」

マカレーナは、「祖父ヘルマンから二〇〇〇年三月三十一日、自分の出生と生と生い立ちについてすべてを聴かされた。死んだ育ての親アンヘル・タウリーニョから生前、何度も涙声で謝罪されたが、その意味が理解できなかった。祖父の話をして初めて理解できた」と語った。育ての母エスメラルダは存命だ。

マカレーナは一〇月二四日、亜国法廷で「組織的児童拉致容疑」で裁かれている元軍政大統領ホルヘ・ビデラ（別の人道犯罪で終身刑確定済み）の公判に、モンテビデオからビデオ証言をした。その折、「自分の真のアイデンティティーがわかった時、自分が完全になったような気がした」と述べた。

ウルグアイ国会は一〇月二七日、「人道犯罪時効撤廃法」を可決した。ホセ・ムヒーカ大統領が二八日署名し、発効した。最高裁はことし五月、「人道犯罪は一〇月一日に時効となる」と判断した。その期限が刻一刻迫っていた一〇月末、同法は辛くも成立したのだった。同法に

は、「国家は、一九七三年六月二七日から八五年三月一日までの軍政時代の国家テロリズムによる犯罪を断罪できる。それは国際規約上の人道犯罪であり、裁くのに時効はない」と明記されている。民政移管翌年の一九八五年サンギネティ政権下で、「軍政期の人道犯罪は裁かない」とする「国家制裁権失効法」が成立した。国論は二分され、一九八九年と二〇〇九年の二回、この法律の存廃をかけて国民投票が実施され、二度とも僅差で存続派が勝った。だが、米州人権裁判所は、この「失効法」の効力を否定し、「時効撤廃法」成立に有利に作用した。

ウルグアイの法廷は一〇月二七日、大統領の署名を待つ間もなく、MC拉致・拷問・殺害に関与した軍人五人、警官一人を起訴するよう命じた。新法発効の二八日、女性二八人が、軍政時代に拘置所で受けた性的暴行に関して軍人約一〇〇人を告訴した。二九日にも人権蹂躪一七〇件の告訴がなされた。

詩人ヘルマンは一〇月三十一日メキシコ市で、嫁MCの拉致について、「腹（妊

婦）の誘拐だった。アルゼンチンとウルグアイの軍政間の組織的な拉致被害者交換で、嫁はウルグアイに連れ去られた」と語った。

一月一日、市民九〇人が、軍政時代に受けた拷問に関して軍人約一〇〇人を告訴した。

★ 伊 高 浩 昭 ブ ロ グ
<http://vagpress-salvador.blogspot.com/>

「ワンカーヨに響くオルケスタ・ティピカ」

と、地を這うようなアルパの低音の上を自由に流動する、魔術的魅力に彩られた切り裂くようなバイオリンの高音。オルケスタ・ティピカと呼ばれる編成によって紡ぎだされる地域について今回は話してみたい。

ペルーのオルケスタ・ティピカは、バイオリンとアルパに、十台弱の大小様々なサクソフォン、時に若干のクラリネットを加えた構成だ。腹の底に響くようなアルパのベースに導かれ、緊張感あふれるバイオリンの高音が哀愁漂う旋律を奏で、曲の導入を彩る。やがてユニゾンになりきれない奔放なサククス群による重厚でしなやかなメロディーが主旋律を引き継ぎ、荘厳とさえ感じる舞曲へと展開していく。曲が終わると再びバイオリンとアルパに引き継がれ、また次の曲へと展開していく。このサイクルが継続していくこと

を、人々は途切れることなく踊りかせる音楽なのである。サククスによるメロディーラインと、アルパとバイオリンによる間

奏。このふたつの緩急の付け方がまさに絶妙としか言いようがない。ライブなどでは、間奏の際にMCが入ったりする事もあるが、MCが終わるまでバイオリン奏者は妖艶な独奏を即興でいくらかでも弾き続けるのだ。さらに時として歌により演奏が華やかに彩られることもある。

このオルケスタ・ティピカが好まれるワンカーヨは、ペルー中部アンデスに位置するフニン県の標高約三二〇〇メートルに位置する県庁所在地で、ペルー第五の人口を誇る都市だ。ペルーを代表する料理、パパ・アラ・ワンカイナ(ワンカーヨ風じゃがいも)で有名な地域である。

フニン県のワンカーヨから北西部に続くマンタロ盆地の民族衣装は、花や鳥、蝶などの目の覚めるような美しい刺繍で有名だ。凝った刺繍が施されたスカートとマンタ(肩掛け)で女性には身を包み、男性はベストで対抗する。そんな美しい衣装に彩られた男女が、激しく叫びながらオルケスタの演奏に合わせて踊る光景は圧巻である。

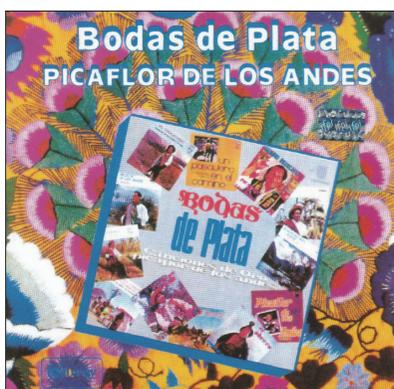
フニン県を中心とするペルーの中部アンデス地域は、首都リマからのアクセスも比較的容易であったため、道路の整備が整い始めた二十世紀の早い時期からリマへの移民を多く輩出し、山深い南部地域よりもひらけた文化が開いた地域だ。そのため、大衆音楽として早い時期から多くのスターを生み出し、大きな影響力を与えた地域でもある。

マンタロ盆地は、このオルケスタ・ティピカの盛んな地域で、アンデス全土で演奏されるワイノに加え、農業歌から発展したといわれる、激しいサパテオ(ステップ)が特徴的なワイラシュ(ワイラスとも)でも有名である。その他、ムリーサやチョンギナーダ、トゥナンターダ、サンティアゴなど枚挙に暇がない。とくにワイラシュは民衆音楽として広く演奏されるのみならず、リマでも好んで踊られるほど多くのヒット曲が生まれ人気を博した音楽だ。ワンカーヨではワイラシュの踊りのコンテストが週末にスタジアムで開催され、ワイラシュの踊りの発展に大きく寄与した。

古くはマンタロ盆地周辺でもケーナやマンドリン、ティンヤ(平太鼓)などがバイオリンやアルパと共に演奏されていたと言われている。しかし二十世紀前半期に徐々にオルケスタ・ティピカのスタイルが人気となり、半ば頃までにこの地域のスタイルとして固定化されたようだ。一方、中部以外のアンデス地域では、音量の大きさや見栄えの良さからバンダ(ブラスバンド)が各地の祭りで浸透し、トランペットやバリトンが花形となった。ペルー全土で結成されたバンダとワンカーヨのオルケスタと聴き比べてみると、それぞれ少しずつ異なる指向性を持つていることがわかる。オルケスタはバンダ演奏に比べ、演奏がしなやかで艶っぽく、歌の伴奏としても魅力を発揮する。一方バンダの方は、力強く奔放で、歌の伴奏として用いられることはなく、多くが踊りの伴奏に特化しており、

聖体行列でも好んで使われた。

二十世紀半ばに活躍した、マンタロ盆地発の大スターをあげるなら、何を聞いてもフロール・プカリーナとピカフロール・デ・ロス・アンデ



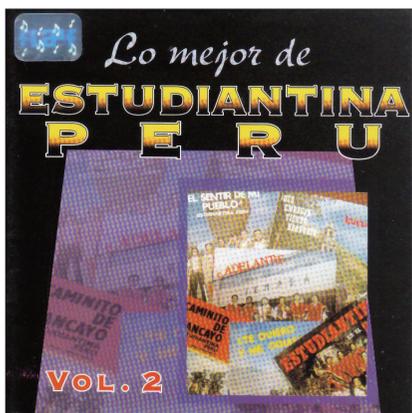
スの二人だろう。フロール・プカリーナは、ワンカーヨ近郊のプカラ出身で、「アイランピート」などの多くのヒット曲を輩出した。

そしてアンデスのハチドリを名乗るピカフロール・デ・ロス・アンデスことビクトル・アルベルト・ヒル・マイマは、一九五九年にリマのラジオ局のコンクールで優勝したことで有名になったワンカーヨの歌手だ。数多くのレコードを録音し、今も愛されるスタンダード曲を多く残した名歌手だったが、残念ながら巡業先で肺炎を悪化させて亡くなってしまった。

ワンカーヨを中心とするこの地域の歌は、伸びやかながら力強いのが特徴だ。甘く伸びやかな北部のアンカシユと、力強いこぶしを聴かせるとアヤクーチョと比較すると、地理的にも嗜好的にも中間に位置するといってもいいかもしれない。特にこの時代の演奏には、重厚さと優雅

さが同居した独特の美学が感じられる。時が経つにつれこの雰囲気は失われていくが、二十世紀半ばごろのワンカーヨ音楽には、他の地方、時代にはない一つの完成された魅力がある言っていだろう。

ちなみに、ワンカーヨの有名な楽団で、オルケスタ・ティピカ編成でないものもある。その代表格がエストウディアンティーナ・ペルーだ。スペイン起源のエストウディアンティーナは、



ラテンアメリカ各地の都市に土着化したスタイルで、マンドリンやギター、バイオリンを中心に弦楽合奏団の編成だ。

このエストウディアンティーナ・ペルーも弦楽合奏と歌で「黒鷲」「ワンカーヨへの道」「おいらはよそ者」など多くのワイノの名曲を演奏した有名楽団だ。

次世代の大ヒット歌手といえば、ワイラシユ「ピオ・ピオ」を一九八七年に互いに異なる歌詞で歌い大ヒットを飛ばした、ペルーの恋人ことアマランダ・ポルターレスと、エウセビオ・チャト・グラードスであろう。アマランダ・ポルターレスは、ワイラシユの「ピオピオ」やムリーサ

の「デイレ」、ワイノの「クリスタルのコップ」など、多様なワンカーヨ歌謡を聴かせたのに対し、チャトは、徹底的にワイラシユにこだわり、踊らせることに終始した。ピオピオの歌詞にしても、「かわいいひよこ」の歌として歌ったアマランダとは対照的に、チャトの歌詞はワイラスの踊りをテーマにし、踊れ踊れと煽っている。オルケスタ・ティピカのスタイルのテンポを早め、よりアグレッシブになったのもチャトの時代以降だとされる。またオルケスタ編成に変わり、キーボードやエレキパーカッションの導入などさまざまな実験的な演奏も始まり、ワイラシユ自体が大きく変遷したのもこの頃だ。

二〇〇〇年代に一世を風靡した歌手といえば、クンビア人気の時代を反映した女の子グループ、チカス・マニャネーラスだろう。オルケスタ・ティピカにキーボードを加えた編成にのせて五人で踊りながら歌い、ペルー国外まで広く流行したグループだ。前回に少し紹介したジャズ・サックス奏者ジェアン・ピエール・マグネトが結成したセレナータ・デ・ロス・アンデスは、マンタロ盆地が誇るオルケスタ・ティピカの編成にサンポーニャと打楽器を加えた新たなスタイルで、アンデス音楽の可能性を模索している意欲的なグループだ。その他数多くの音楽家たちがワイラシユやオルケスタのスタイルをたたき台にし、新たな可能性を積極的に探っている。その玉石混浴ぶりを味わうのも、またペルーアンデス音楽の楽しみなのである。

(水口 良樹)

タラのビスカヤ風

BACALAO A LA VISCAÍNA



●材料（4人分）

- ・ 棒鱈 300グラム
- ・ ホールトマト（皮をむいてあるもの）缶詰 1缶
- ・ タマネギ中 1/2
- ・ ジャガイモ 中 4個
- ・ ローレル（月桂樹） 1葉
- ・ 生のパセリ 2枝
- ・ オリーブオイル 大さじ5杯
- ・ 黄色かオレンジ、赤いピーマン（緑はダメ） 1/2
- ・ 水 1カップ 塩
- ・ 甘めの白ワイン 1/2カップ
- ・ フランスパン

●作り方

- 1) 棒鱈を前夜から水につけておく
- 2) 水を捨て、新しい水でゆでる。ゆでた水も捨てる。
塩辛い場合は、同じことを繰り返して塩分を抜く。
- 3) 鱈の塩が抜けたら冷まし、骨を取り除く。指で小さくちぎる。
- 4) ジャガイモを洗い、柔らかくなりすぎないように気をつけてゆでる。皮をむき、1・5センチ角に切る。
- 5) タマネギを4つに切り、細く薄く切る（薄くなりすぎないように）。ピーマンの種を取り除き、1センチ角に切る。パセリを洗ってみじん切りにする。
- 6) トマトを細かく切る。
- 7) フライパンにオリーブオイルを敷き、トマトと月桂樹、パセリ、ピーマン、タマネギ、タラを炒め、白ワインと水を加える。ほぼできあがったらジャガイモ加え、煮崩れないように気をつけて混ぜる。
- 8) 塩で味を整える。火を弱めて、汁が減るまで煮る。
- 9) 大きめの平皿によそいフランスパンを添える。細切りのハレペーニョやアボガド、メキシカンソースを添えるとさらにメキシコ風になる。シャンパンや白ワイン、ビールといっしょにどうぞ。

クリスマスも間近になったので、今回は、干し鱈（棒鱈）とトマト、ジャガイモを使った料理「タラのビスカヤ風」を紹介いたします。

以前タラを使った料理をつくりましたが、今回の材料は干し鱈です。

この料理は、スペイン・バスク自治州のビスカヤ県（県都はビルバオ）で生まれました。

スペインのこの地域の食文化は世界でも名高く、なかでもオリーブオイルで味付けする「Bacalao al Pil-Pil（タラのピルピル）」や、「Bacalao a Viscaína、Marmitako（カツオとジャガイモの煮込み料理）」、「Merluza a la Ondarresa（オンダレタ風の鱈料理）」

などが知られています。

バスクとメキシコの料理は、味や香り、色、食材においてお互いに影響を与え合っています。たとえば、「タラのビスカヤ風」で使われるトマトはメキシコ原産です。植民地時代が終わると、政治的理由で数千人のバスク人がメキシコに逃れてきて、後に国籍を取得しました。その結果、料理にも多大な影響を与え、数世紀の時を経て、多くのバスク料理が、メキシコの食材によって驚くほど豊かになりました。

今回、ここで紹介する料理も名前は「ビスカヤ風」ですが、ユカタン半島スタイルです。

メキシコではクリスマスには七面鳥

を食べるのが一般的ですが、「タラのビスカヤ風」を食べる地域も少なくありません。

私が子どものころ、母はクリスマスや四旬節の聖金曜日、家族の誕生日などにこの料理をつくってくれました。ユカタン半島の先住民には干し鱈を食べる習慣はそれほど広がらず、大都市の住民のほうがバスク料理の影響を受けていました。しかしユカタン以外のいくつかの州では、この料理はクリスマスによく食われています。地域によつて料理法はバラバラですが、どこで食べてもとても美味です。

よいクリスマスをお過ごしください。

ベネズエラ——先住民族大学

ベネズエラ南部の密林に先住民族大学が設置された。2000ヘクタールの敷地があり、タウカ川が流れる。キャンパスには約100人の学生が民族ごとに寄宿している。女子学生は5人だけで、民族に関係なく一緒に寄宿している。異なる民族の若者が一緒に学ぶのはこれが初めて。授業では、学生たちは先住民の権利、言語、神話について学び、午後は畑を耕したり水牛を飼ったりする。ある学生は「この場所が自分にとって大切なのはまるで共同体にいるようだからだ」と話す。

この大学はさまざまな共同体のメンバーやイエズス会神父らが作った先住民族の権利擁護組織によって数年前に建設された。近年、先住民族の生活スタイルや取り巻く環境は金鉱、ダイヤモンド、石油などの天然資源の搾取によって脅かされている。現在、イエクワナ、ペモン、ヤノマミといった先住民族は人口の2%を占めるにすぎない。彼らは外界との接触で文化や伝統を失うことを怖れており、先住民族大学はこうした傾向に歯止めをかける目的がある。チャベス大統領は1999年に大統領に就任後、憲法を改正して先住民言語をスペイン語と共に公用語とした。

入学するのは共同体から推薦された者で、3年または4年間の学業を終えた後は、共同体に戻り、リーダーとなることが望まれている。学生たちは医学や科学技術のような学科を勉強する一方、休みの期間の課題では村の古老たちに神話について語ってもらい、後世に残すために記録するなど自分たちの共同体の文化や知識をより深めている。大学は正当な高等教育機関として政府から承認されるのを待っている。現在はNGOの基金で運営しているが、資金繰りは苦しく、政府からの資金的、政治的援助が必要だ。(BBC.MUNDO.2011/10/27より)

ラテンアメリカ・カリブ地域——飢餓と栄養失調

世界の食糧生産の主要国にもかかわらず、ラテンアメリカ・カリブ地域は地域人口の35%にあたる2億900万人が貧困状態にあり、うち8,100万人が飢えと栄養失調に苦しんでいる。国連食糧農業機関(FAO)によれば、物価高騰と生産力低下のため、今後数年はさらに状況が悪化するという。

FAOと農業発展の国際農業開発基金(FIDA)、世界食糧計画(PMA)の3機関は、世界で飢餓に苦しむ人の割合を2015年までに半減させるミレニアム開発目標の達成は難しいとしている。

食糧の輸入に頼っていることと、輸入食料の高騰が危機を増大させている。FAOは伝統的な食糧生産法を取り戻すこと提唱し、ボリビアでは、今年6月末に農牧・共同体の生産革命法を布告、食糧主権や農業保険など小農民のための農業振興を目指している。組み替え遺伝子や農薬を使用せず、相互性に基づく伝統的な生産方法を推進する。

PMAによれば、ラテンアメリカ・カリブ地域は政治的、経済的に著しく発展しながら、世界で最も富が不均衡であり、食物自給率が130%以上あるにもかかわらず多くの人々が十分な食料を得られていない。自然災害が増大していることもこれに拍車をかけている。また、バイオ燃料の生産拡大もこれまで人間や家畜の食糧に向けられていた種子や穀物が大量に使用され、食糧危機の悪化を招いている。(Noticias Aliadas/2011/10/27より)

アルゼンチン大統領選——クリスティーナ・フェルナンデス大統領が再選される。得票率は54%で、前回選挙より6ポイント増で、1983年に軍政から民政移管されて以来の最高の得票率。(Noticias Aliadas/2011/10/31より)

ニカラグア大統領選——予想通りダニエル・オルテガが再選。憲法では再選不可だが、サンディニスタ系が多数を占める憲法裁判所がオルテガの立候補を認めたもの。オルテガはサンディニスタ刷新運動などから選挙参加権をはく奪しライバルを一掃する一方で貧困対策プログラムなどを推進し支持率を上げていた。(El Nuevo Diario 2011/11/7, Revista Envioなどより)

今年も震災もあって落ち着かない一年でしたが、はや師走を迎えました。今は嫁ぎ先の手伝いで正月飾りのセンリョウの出荷に追われています。振り返ってみれば、心揺れる日々も、グアテマラの厳しい状況の中でふんばっている仲間、そしてそれを応援する仲間の強さに力をもらいながらここまで来ました。来年は被災者の方々、グアテマラの人々、世界でがんばっているみんなにとって、どうか少しでも光の見える一年になりますように。(片岡 桂子)

次回の「そんりさ」発送作業は 月 日(土)の予定です。
参加いただける方は連絡ください。

メーリングリストのご案内： 会員・購読者は無料で参加できます。
E-mail: recom@jca.apc.org までアドレスを連絡ください

ホームページのご案内 レコムホームページがどんどんリニューアル！
<http://www.jca.apc.org/recom/>

- | | | | |
|---------|-----------------|---------|-----------------|
| Vol.133 | グアテマラ総選挙 | Vol.129 | コロンビア政治状況の変化と行方 |
| Vol.132 | ボリビア・ガソリン危機 | Vol.128 | ペルー・バグア事件とその後 |
| Vol.131 | エクアドル・アマゾンの石油開発 | Vol.127 | コロンビア先住民少年マウロ |
| Vol.130 | 中米に広がるナルコ | Vol.126 | エクアドル・フェアトレード |

レコムに入会(もしくは購読)すると、メーリングリストにも無料で参加できます。
入会したら、自己紹介メールを添えて recom@jca.apc.org までご一報を。登録します。
レコムの活動は会員のみなさんによって支えられています。

☆郵便振替口座：00110-7-567396 日本ラテンアメリカ協力ネットワーク

☆会員 年 8000 円(学生 5000 円) …会の運営、総会での投票、『そんりさ』、資料閲覧・貸出

☆賛助会員 年 10000 円(一口) …資料閲覧・貸し出し、『そんりさ』購読、総会への参加

☆『そんりさ』購読者 年 4000 円…『そんりさ』の購読、メーリングリスト参加可

レコム連絡先

〒616-0004

京都市西京区嵐山中尾下町 20-15 太田方

TEL&FAX 075-862-2556 (留守電)

お問い合わせは、E-MAIL・FAX・手紙もしくは
留守番電話にメッセージをお願いします。

<レコム口座>

63万1926円

<グアテマラ基金>

31万851円

(2011年11月現在)